犯罪

伊藤整

氾濫

伊藤整

昭和三十三年十月二十日　發行
昭和三十三年十月三十日　三刷

定　價　三六〇圓
地方賣價　三七〇圓

著　者　伊　藤　整
發行者　佐　藤　亮　一
發行所　株式會社　新　潮　社
東京都新宿區矢來町七一
電話東京(34)代表七一一一—九
振替東京八〇八番

(乱丁、落丁のものは本社又はお買求めの書店にてお取替えいたします。)

印刷　二光印刷株式會社・製本　新宿加藤製本所
© Printed in Japan

氾

濫

裝幀　加藤榮三

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

1

高分子學會の開かれてゐる成律大學といふのは、私立大學の中で經營が樂だと言はれる學校であり、戰後初めて工學部を置いたので、工學部の校舍は新しかつた。舊東京市内のことで、敷地には餘裕がない。しかし、外濠を見下す岡の斜面に建つた彎曲した正面を持つた扇形の六階建では、大變目立つた。ここを訪ねて來たのは初めてだが、眞田佐平はこの建物を何度も遠くから眺めたことがあつた。日曜が祭日に續いた秋の日を利用して開かれた學會の今日は二日目だつた。眞田は街のタクシイを拾つてやつて來た。車を出たところで、彼はちよつと立ちどまつて眺めた。この建物の一階は八本の太い脚のやうな柱が立つてゐるだけで、カー・ポートになつてゐた。そこは二十臺ほどの車で一杯になり、あまつた車は、日蔭を求めるやうに舊校舍の前の並木の下にも並んでゐた。この建物の一階の横に、白く大理石を生かした幅廣い階段がある。それと並んだエレヴェーターの前には、「第五回全國高分子學會　二階」といふ立看板が、寄せかけてあつた。

秋の始めの強い日射しが、半ば白い眞田の髪に當つて光つた。太り氣味の五十男の眞田佐平は、建物の中に入り、車の間を縫つて行つた。運轉手たちが車の中で眠つたり、雜誌を讀んだり、エンジンをのぞいて見たりしてゐるだけで、あたりは、ひつそりとしてゐた。眞田は急ぎ足で白い石の階段を登つた。二階の廊下でも物音はほとんどないが、五つほど先の右側の室のドアが半ば開いて、室から溢れたやうに四五人の男がそこに立つてゐた。講演調で喋つてゐる聲がその室から流れ出てゐる。

眞田は直感的に、接着劑の部會だな、と思つた。化學屋の中の山師的な連中がいま手頃な金儲けの發明探しに、接着劑の畑に集つて餌をさがしてゐる。ポリエチレンの接着劑に十萬ドルの懸賞金がかけられる、といふやうな發明狂的な空氣が國際的に動いてゐるのは、この分野なのだ。理論は、この分野では、ほとんど役に立たない。設備といふものもまた、二坪の實驗室で間に合ふかも知れないのだ。着想とカンに自信のある連中、大會社に入り込めなかつた二三流の頭の化學屋が、一旗擧げようといふ氣持でこの分野に流れ込んでゐる。その外にも、街の玩具屋などで、手

頃な金屬の接着劑があつたらと思つてゐる連中が、工夫の種になりさうなものを求めてやつて來てゐる。纖維や塗料をやつてゐた者も流れ込んだので、戰前にはほとんど緣のなかつた研究者たちが、この學會に集るやうになり、それが發明狂や山師たちとごつちやになつてゐる。

眞田は、自分が大學を出た頃の、人氣のなかつたこの畑のことを考へた。接着劑、塗料などは研究者の少い、目立つた進歩の見られない畑であつた。船底塗料には船會社や軍部から大學へ研究費が出てゐたが、特に目立つた業績を作り出せるものがなかつた。接着劑の畑では、長い間、ニカワ、大豆蛋白、牛乳カゼイン、コンニャク糊などが研究の對象だつた。昭和十九年、日本軍はコンニャク糊の風船に爆彈を結びつけてアメリカ大陸まで飛ばした。その時、眞田は、母校の教授をしてゐた久我象吉の推薦で助言役に引ぎ出された。眞田は大學生時代から「ノリ屋さん」と言はれてゐた。靜岡縣で小さな合板工場を經營してゐた父の仕事を繼ぐために、彼は學生時代から、大豆カゼインの研究を少しづつしてゐた。しかし、その工場は破產し、彼は苦學して大學の後半を終へ、三立化學といふ小さな會社へ入つたのだ。

眞田はその室に向つて靴音を立てぬやうに歩いて行きながら考へた。高分子學會か。立派な名前がついたものだ。日本軍がコンニャクで紙袋を貼つてゐた時、ヨーロッパではアルミニュームをアラルダイトで貼り合せて飛行機を作つてゐた。ポリエステルとガラス纖維から作られた鐵やアルミニュームよりも强度の高い强化プラスティックで、戰時には上陸用舟艇や自動車の車輪などが作られてゐた。鹽化ビニール、ポリエチレン、ポリスチレン、メタアクリル樹脂、弗素樹脂、珪素樹脂など數多くの高分子物質が發明され、利用されてゐた。そして、エポキシなる輕金屬接着劑が第二次大戰に出現してから、材料、塗料、接着劑の革命時代が始まつたのだ。合成樹脂といふ名で最後に現れたところのノリの一種が、いま鐵やアルミに代りつつある。水道管などはもう鐵で作られなくなつた。リベットうちや、電氣溶接や釘打ちが省略されて、ノリで接着される。飛行機、自動車、建築物の材料が、そのノリと同じポリエステル系の物質で作られ、またその種の接着劑で組み合される、といふ時代がいま來かかつてゐる。

眞田がそのドアに近づくと、三十歲ほどの教師らしい男が、目禮した。彼は輕く禮を返して、そのそばに立つた。その男は眞田が室内をのぞけるやうに場所を讓つた。見たことのある顏のやうでもあつたが、思ひ出せなかつた。眞

田はその時、工場で工員たちの中の小さなボスが、新米の連中を脅かすに使ふ言葉を頭に浮べた。「おれを知らねえ奴は屑物だ。」この學會での彼の立場は、その言葉の通りになつてゐた。眞田の顔を見覺えてゐるものは、特許マニアや山師でなく、多少とも學問につながつてゐる人間だと考へてよかつた。この七八年間の急激な高分子學の發達とともに、その構造についての先驅的な研究者として、眞田は外國で知られ、それに次いで日本でも學者として著名になつた。それまでの彼は、町工場じみた小會社の技師でしかなかつたのだ。この二三年來、眞田は、講習會や大學の研究室などで、自分の見知らぬ後輩たちに敬意のこもつた目で眺められ、集會ではよい席を與へられることに慣れてゐた。そして、五十歲に近くなつた頃から急にふえた白髮と、長年工場で人を使ふ間に身についた、表情を抑制した顏つきが、さういふ敬意を受けるにふさはしい威嚴を彼に與へてゐた。

百人ほど入るその教室で、ノートを前にして喋つてゐるのは、長島研究所の長島省一であつた。彼は太つた赤ら顏で、短くハアハア息をつきながら、常溫硬化型と加熱硬化型との說明をしてゐた。そのキンキンと響く聲は、滿員で後方に立つてゐる者のゐるこの室內を息苦しくしてゐた。向う側の、教壇のすぐ下に、この大學の木瀨教授がゐた。髮の毛が大分薄くなつた木瀨喬作は、眞田が大學生のとき同じ研究室の一年下級にゐたのだ。卒業後地方の專門學校で、纖維の講義をしてゐたが、この大學に工學部が新設されたとき、招かれて、新しい學問である高分子學を講義することになつた。そして、木瀨喬作は眞田を頼りにして、しばしば三立化學の研究室にやつて來た。木瀨は、高分子學なるものをほとんど理解してゐなかつた。原理の大部分が不明のまま、實驗と試作から歸納される效果といふものが研究の大部分をなすこの分野では、誰もが理論上の自信を持つことができなかつた。眞田のパンフレット「接着力の推計學的考察」を木瀨はこの大學で解說しながら學生と實驗してゐるのだつた。

木瀨喬作は戶口のところに誰かが遲れてやつて來たのを感じて、目を擧げ、そこに眞田佐平の顏を認めた。そして眞田の目が彼の目と逢つたとき、木瀨は立ち上つて、自分の掛けてゐた椅子を指差した。それから彼は背をかがめて長島省一の喋つてゐる演壇の下を、首をすくめて通り、入口の人込みを分けて眞田を呼び入れようとした。演壇のわきの席は、この分野の權威者か世話役だけが坐るのだ。眞田は首を振つて拒んだ。しかし、室の人たちの注意が、報告

者の長島から離れて、自分と木瀬の小聲のやりとりに集中しさうな氣配を感ずると、眞田は木瀬に從つた。彼は足音を立てぬやうに、少し首を垂れて演壇の前を通り、木瀬の席の隣に脚を組んでゐる會長の沼田博士の頰のこけた長い顏に輕く會釋してから、その横の椅子に腰を下した。眞田がそこへ坐らうとした時、沼田博士のうしろに久我象吉の坐つてゐるのが目に入つたが、久我は彼の方に顏を向けなかつた。そのことが坐つてからも眞田の氣になつた。誰か分らないが、眞田の後から、今日の報告者たちの話の要項を書いた四五枚綴ぢのプリントを差し出した。眞田はその人の顏を見ずに、受け取つて、頭を下げた。

眞田は、そのプリントをちよつとめくつて見てから、長島の報告に耳を傾ける態度をつくつた。しかし彼はそれを聞き分けるだけの注意を拂はなかつた。眞田は長島のその研究、接着力と熱の變化との關聯についての急所は、もう前に長島から聞いて知つてゐるのだつた。その實驗のデータをいま長島は、學問的なスタイルの中に何とかしてはめ込んで話さうと、その研究報告の形式に專ら力を入れながら喋つてゐるのだつた。眞田は、人々の注意が長島から離れて自分に集つた氣配があつた時の緊張感から少しづつ拔け出した。そして、ちらと腕時計を見た。二時であつた。六時までに終るだらうか。六時に西山幸子に逢はねばならなかつた。

西山幸子、十年の後に彼の身邊に現れたその女のことを彼は考へた。彼は長島省一の聲を聞きながら、回想の中に落ち込んだ。本當に彼女の子はおれの子供だらうか？ その考が彼を壓迫した。しかし、拔け道がなかつた。いやな後味を殘したまま、彼はその考から離れて、いまうしろに坐つてゐる久我象吉のことを考へた。眞田は、自分が長い間、母校の教授になつてゐる久我象吉を羨み、妬んで來たことを思つた。眞田佐平は、久我象吉の地位を羨んだといふより、その生れを羨んだのだつた。久我は眞田と高等學校からの同級生であつた。人造絹絲の化學構造を研究して久我は大學に殘り、助手になり、留學から歸つて、助教授になつた。そして、その頃から久我は合成樹脂の研究に移つて、學位を取り、教授になつた。戰後は高分子學會の代表的な發言者として、しばしばジャーナリズムに名を出し、學會の實行委員となり、機關雜誌「高分子學」の編輯を實質的に支配してゐた。久我は、母校の官立大學に根强い閥を持つてゐると言はれた上田系の子弟の一人である。明治時代の初期にこの大學の創立に關係した財政家の上田敬一は、その數人の娘たちを、全國から秀才の集るこの大學

の優秀な學徒を選んで結婚させた。その間に生れた子供たちのうち、更に女の子は、その次の代のこの大學の秀才たちを選んで娶らせた。それ等の學徒は生活費にも研究費にも困らず、學問の業績をあげた。優生遺傳學の證明のやうに、頭のよい子や孫がまた生れた。それが三代か四代續くと、この大學の教授の椅子の三分の一ほどは、それぞれ姓を異にしながらも、明治の財政家上田敬一の血を引く秀才たちによつて占められるやうになつた。それは人工培養された秀才の一族であり、他の教授たちは日本の各地に突然變異的に生れた偶發的な秀才たちであつた。久我象吉はその上田敬一の孫か曾孫かに當つてゐた。

久我象吉は額が白く、輝いた目を持ち、頼りないほどひよろ長い身體をして、大學の構内を鞄をかかへて歩いた。その動作や表情には、育ちのよさから來る品のよさと、聰明さが漂つてゐた。避暑地、音樂會、獵、ゴルフといふやうな生活の伴奏をその身邊に持ち、學者として理想的な經歷を踏んで、出世して行く久我象吉を、眞田佐平は、町工場がやつと株式會社になつたやうな、三立合板の予會社なる三立化學株式會社の技師として見てゐた。借家住居、裏がへした服、十年前からの帽子といふやうな、町工場の一技師の卑屈な生活條件が眞田を縛りつけていた。眞田は初めは、單に合板の耐水性や經費節約を目標にしてノリの研究をやつていたが、次第に效果を擧げた。それが認められて、戰時中は飛行機用の強化木を合板の理論で作るために軍から經費を與へられた。はじめて彼は三立化學の中に自分の研究室らしいものを作ることができた。その頃から彼は、時々大學へも出かけて、多少研究者らしい待遇を久我象吉から與へられるやうになつた。久我は、戰前ドイツで手に入れたまま、自分は關心のないまま開いても見なかつた接着劑の研究報告を何册か眞田に貸し與へた。尿素樹脂を使つての強化木の研究が、飛行機材料の不足とともにもう少しで實用化しさうになつた時、戰爭が終つた。そして戰後は、飛行機材料としては強化木は考慮の外に置かれ、建築材料として改めて考へ直された。

戰爭後間もなく、戰時中の歐米の合成樹脂系の研究の目を見張るやうな進歩が分り、纖維業者、建築業者が海外の特許をもとめて右往左往した時、大學の研究室は何の役にも立たなかつた。學者たちは業者の研究室に立ち遲れさうになつた。やむを得ぬ形で私企業の實驗室と大學の研究室が協力しはじめた。高分子學といふものが大體形をなし、合成樹脂の古い研究家である沼田博士を會長として會を作り、久我象吉が「高分子學」なる研究雜誌を學會の機關雜

誌として作り出した時、眞田佐平は、久我象吉の協力者として、その雜誌に力を貸した。そして、合成樹脂系の接着劑の接着力と化學構造の關係についての推定的な理論を述べた眞田の研究論文がそれに掲載された。しかし學界では誰もそれを批判するものがなかつた。眞田のその論文の重要性に最初に言及したのは、久我象吉であつた。そのため久我は眞田佐平を半ば自分が庇護してゐる後輩のやうに扱はうとし、眞田もまたそれに調子を合せた。久我象吉が、企業體の研究者たちに向つて、眞田の理論を、自分の指導によつて出來たものであるかのやうに語つてゐることが、間接に眞田に分つて來た。

この分野の研究には物性的なごく基礎的な理論はあつたが、實際の接着劑に適用できるやうな化學構造と接着の本質に關する理論はほとんどなかつた。眞田は、學生時代から自分の研究のみならず接着性に關係のあるあらゆる文獻に載つてゐるデータをカードで分類してゐた。それは、いつどのやうに役に立つものか見當もつかなかつたが、彼は町工場の技師として無爲に、無名に送るであらうところの自分の生涯の佗しい見透しに、その分類カードによつて僅かに抵抗し、慰めを見出してゐたのであつた。それを學校卒業後二十年間も續けながら、時々眞田は、これは徒勞だ、單なる自己滿足の蒐集だと思つた。しかしまた時には、そのうちにそれが錬金術のやうな思はぬ結晶を産み出すかも知れない、と考へた。戰時中に久我象吉から貸してもらつた僅かの外國の資料もまたそれに加へられた。眞田は、そのカードに載つてゐない物質と接着性物質との實驗を少しづつしては、書き込んで行つた。そして、それは戰後流入した多くの資料によつて補はれた。

それ等の數字の無數のデータから、どういふ方法で業績らしいものを抽出できるか彼は分らなかつた。氣象臺に勤めてゐる野島勇がある時推計學の話を眞田にした。それは啓示であつた。眞田は數學が得意であつたので、野島勇について推計學の新しい理論を大體學び取つた。眞田は、これまでのデータをそのやり方で處理して、當時新しい學問として注目され出した高分子の構造粘性に關するレオロジー的考察を參考にすれば、色々な接着劑の性質を數式で示すことが出來ると思ひ、戰後三年ほどそれに熱中してゐたのであつた。それが「高分子學」の第一號に發表された彼のたどたどしい英文の論文であつた。久我が學位を請求して見ては、と言つてくれるかも知れない、と眞田は思つたが、その氣配は遂になかつた。そのうちに、アメリカの學者からその雜誌をもつと送つてほしいといふ問ひ合せがあ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

り、それについでフランスやスイスから賞讃の手紙が來た。そして、一流のK新聞のその年の學術賞が眞田のその論文に與へられた。眞田を推したのは、合成樹脂の粘着成分の分析的な研究を長いこと續けた舊師の沼田博士であつた。沼田博士は、その新聞の賞の銓衡委員をしてゐたのだつた。その頃沼田博士は教授の席を久我象吉に讓つて、名譽教授としての地位しか持つてゐなかつた。ちやうど大學制度の變革期で、大學院で教へる資格を教授たちに與へるためには學位を持たせる必要があつた。論文めいたものさへ提出すれば、今のところ、教授會議は簡單にその人々に學位を與へるのだ。學位を手に入れるのは今のうちだつた。しかし沼田博士は久我をはばかつて、眞田を推さなかつた。眞田を推すことは、眞田に大學院の講師の席を一つ與へるやうに暗示することとなりはしないか、といふ氣配があつた。そして眞田は、町工場の技師といふ地位に安定感を抱いてゐるやうな顏をしてゐた。新聞社の賞や海外の反響などといふものが、大學に籍を持つ學者たちの嫉妬を招いてゐることが、その時眞田佐平に分つてゐた。自分を包んでゐるそれ等の思ひがけない榮光を、何かの間違ひであるかのやうな態度で、眞田は、學者たちの前では地味に素人らしくしてゐるやうに努めた。「ちやうどいい時に久我君が資料をまはしてくれたんでして」と彼は新聞記者や科學雜誌の編輯者たちに言ひ、それが久我象吉の言ひふらしてゐることと、口傳ての三人目ぐらゐの所で合致するやうに漠然と豫定した。そのやうにして同輩や專門家たちの根强い嫉妬をそらしてゐても、後輩たちは、沼田博士の戰前の「接着劑概論」といふ古い研究の外には、眞田佐平のその論文を和譯して出したパンフレット「接着力の推計學的考察」しかこの畑で頼りになる理論がないことを知つてゐた。そのパンフレットが、諸大學の研究室や企業會社の實驗室で唯一の分りやすい手がかりとして、絶えず讀まれてゐることは眞田佐平も知つてゐた。

しかし、眞田佐平の身の上の本當の變化は、その後でやつて來たのだつた。それは、彼の會社三立化學が、その有名になつた彼の名を利用して、シバのアラルダイトやシェルのエポンを凌ぐやうな効果率を持つた輕金屬接着劑を作るやうに眞田を驅り立てたこと、そして一年近い實驗の後に眞田佐平がその試作に成功したことだつた。輕金屬と輕金屬、輕金屬とゴムが、ほとんど壓力も加熱もたしに完全に接着した。それはちようど日本の自動車工業が、戰後の虛脫から立ち直り、朝鮮戰爭の車輛修理で驅り集めた熟練工やアメリカ軍の收容解除で戻された工場などを使つて、

國産自動車の改良に乗り出さうとした時であつた。効果率がエポキシ系の外國品と同樣であり、値段が三分の一にしか當らない眞田の創り出したサンダイトは、自動車やラジオや洗濯機や冷藏庫などの輸出工業の發展の波に乘つて、製造が間に合はないほどの需要があつた。三立化學も、親會社の三立合板も、サンダイトの登錄を會社の名でするに當つては、國内では革命的なものであつたこの製品と、眞田のネームヴァリューを高く評價して、目を見張るやうな待遇をした。五百萬圓の一時金の外に、親會社の三立合板の株一萬株と、ちやうどサンダイトの賣り出しに當つて增資した三立化學の新株三萬株を彼に與へた。そして眞田を技師長兼任のまま取締役にした。そのやり方で三立化學は、今後まだ金の卵を產み出すかも知れぬこの技師を、會社の營利組織にしつかり結びつけてしまつた。

會社は收益を擧げて、工場施設を擴張し、眞田佐平は急に收入と資產を得た。自分が、母校の講座を擔當する久我象吉を長い間、羨んでゐたことが、本當だつたらうか、と思ふことがあつた。眞田佐平とその家族の生活は少しづつ變つた。妻の文子は、はじめしばらく、その高收入の生活に慣れず、生活の膨脹してゆくのに抵抗しようとした。眞田もその點では用心深かつた。しかし、戰後に疎開から戻り、家主に追ひ立てられて、やつと見つけた隅田川の東側の低地にある借家は、二三度水害に見舞はれたし、根太が腐つて、家は傾いてゐた。高等學校を終へて、東京の西方の郊外の女子大學に入つたばかりの娘のたか子は、もつと學校に近い所へ越したい、と言つた。生活といふものは、どの部分にも絕えず不滿や缺點があるのだつた。こんな低濕地で、いつまた水害に見舞はれるか分らない不健康なところに、よく十年も住んでゐたものだ、といふ考が、水はけの惡い臺所で仕事をする文子の頭を支配するやうになつた。そして彼女は、もし引つ越すとすれば、どの邊がいいだらう、といふ空想をするやうになり、眞田が早く歸宅して、親子三人が食卓を圍む時の話題として、そのことが繰り返された。娘のたか子は、電氣洗濯機や、扇風器が家に入り、父が大分思ひ切つて買つたらしい大きな電氣冷藏庫が置かれるやうになつてから、家の經濟が變つたことを敏感に知つてゐた。彼女は市内の高臺や郊外の靜かな住宅地にある友達の近代風な家を目に浮べ、家の話が出ると興奮して、それ等の家のことを說明し、自分の好みを主張した。そして、假定から始まつた話が、次第にこの家族を、現實の家を搜さうといふ氣持にさせた。

銀行には七百萬圓ほどの預金があつた。銀行ではこのよ

い得意を放つておかなかつた。行員がやつて來て、小切手帳をお持ちになつた方がお金の出し入れに便利です、と親切に教へ、それとともに、半分位は定期預金にされた方が、はるかに有利で、利子だけで十萬圓近くの違ひが出て來ると説明した。長い間千圓か二千圓の金の使ひ方にも細心に氣をつけて來た文子は、さういふまとまつた金額の話になると、落ちつきを失つた。半分を定期預金にすべきか、三分の二を、といふやうな話を文子が持ち出した。

眞田佐平は、それを何となく、うるさいと感じた。自分の研究室での仕事の成果が、突然何百萬圓かを産み出したのであれば、五萬圓や十萬圓の金に何の意味があるか、といふのが彼の實感であつた。研究の自然な結實として生れたそんな金には意味はない。研究の仕事にだけ意味があるのだ、と彼は感じた。むしろ彼は、金といふものが幸福をもたらすものと分つて來たいま、さういふ幸福を追ひ求めて接着劑や塗料で一儲けをはからなかつた長い間の自分の性根の確かさを考へ直したいところであつた。おれは金を追求して生きたのではない、と彼は言ひたかつた。しかし、結婚以後の長い間の餘裕のない俸給生活や、戰時戰後のインフレーションの中で食糧を集めるのに苦勞した妻の心に出來てゐる絶えず小金を數へる習慣を、彼は憐れみの心で思ひ浮べて沈默した。もつと機嫌の惡い時であつたら、彼は妻を叱りつけただらう。五萬や十萬の金で俺の頭を煩はすな、と。だが、彼の長い間の唯一の贅澤であつた分類カードの補給は、妻のヘソクリの千圓か二千圓でいつもされて來たものだつた。彼はその定期預金の話が出た時、矢つて言つた。

「家がほしかつたら、家を買ふ分だけは定期に入れられないだらう？」

「さうよ、さうよ。私、パーティーを開けるぐらゐの廣間のない家なんて、いやだわ」とたか子が目を輝かして言つた。

そして、豫期しなかつた銀行員の定期預金の勒誘という小事件から、家の話が更に具體化した。今では、もう、當分このままこの家に落ちついてゐるのだと眞田が言ひ聞かせたら、たか子は泣き出す、と思はなければならなかつた。文子は、三百萬圓をすぐ動かせる金として殘しておいた、と眞田に言つた。まだしかし、眞田は體面にこだはつてゐた。おれは金儲けを考へてゐる人間ではなかつたのだ。だから、金ができるのを待ちかねてゐたやうに、氣の利いた洋風の書齋や廣間のある家に引越して幸福さうな顏をするのは、みつともない事だ。と思つた。その上、彼が、シバ會社の製品を凌ぐやうな輕金屬接着劑を、特許を侵さず

に作れたといふのは、ほとんど偶然なのであつた。それは、刑事が老大な指紋の記錄をさがすやうな努力で、眞田が長年蒐集した何千枚かの記錄カードを捜すうちに、偶然見つけた珍しい高分子のイソシヤナートラジカルとベンツォール・ケルンの相互效果による着想だつた。その偶然の發見が、理論家としては國際的に知られる存在になつた眞田佐平を、實驗家としても一流の存在である、と證明してくれたのだ。もし、あの時、あの構造式を見過したら、彼は接着劑の分野で推計學的理論家として著名なだけで技師としては無能な存在として、輕視されながら、今の會社に勤めつづけるか、私立大學の教授をするかして、貧乏な生涯を送ることとなつたに違ひないのであつた。その偶然性の上に居直つて、居心地のよい家庭生活を築くことは、彼の學者としての誇りがゆるさなかつた。

しかし娘のたか子の夢想は、重役で有名な學者でもある父にふさはしい家を持つて、そこに友達を招待する、といふ風に、自然に發展し、具體化してゐた。それが分るとともに、眞田の中で妥協する聲が起つた。家をさがして引つ越しをする、といふことを彼もまた毎朝出がけに頭に浮べるやうになつた。お前は妻や子に無理に引きずられるといふ形式で、ていさいの良い家に住み、重役らしく暮したいと思つてゐるだけだ、と彼の心内で一つの聲が言つた。またその聲は言つた。あのカードはお前の寶の山ぢやないか。まだあの中には、新しい防水塗料や全く別な可塑物を產み出せる着想が、いくつもころがつているんだ。お前の製品は偶然によつて出來たのではなく、お前の理論の當然の歸結なのではないか。家ぐらゐ安心して建てるなり買ふなりした方がいい、と。

銀行員の言つた金利の誘惑によつて、穴から追ひ出された兎のやうに驅け出したところの、新しい家を持つという眞田佐平とその家族の衝動は、不安定な形で立ちどまつているうちに、別な力で更に走り出すことになつた。眞田の近くに住んでゐる吉村忠一といふ五十過ぎの職工長がゐた。朝、眞田はよく電車で吉村と一緒になつた。吉村は眞田が長年監督してゐた三立化學の第一工場の職長で、强化木の實驗以來、いつも眞田の仕事を手傳つてゐた。工場のラジオで終戰の勅語が放送された日、職工たちを並べて號令をかけたのも、敗戰と分つて大聲で泣き出したのも、吉村忠一だつた。腕は確かで、丈が低く、眞黑な顏をして、力自慢で、怒りつぽく、工員たちは彼に信服してゐた。家が眞田と同じ町内にあつたので、吉村の細君や娘は、眞田の家に急な客などがある場合には、しばしば手傳ひに來た

りして、親密な交際になつていたので、たがひの家庭の事情もよく分つてゐた。つまり眞田と吉村とは氣心の知れ合つた技師と職長の關係にあつた。眞田の身分の變化を誰よりも喜んでくれたのは、吉村だつた。眞田の出世は、やがて吉村の立場もよくする筈だといふ約束が、漠然とあつた。しかし、吉村はそれをほとんど純粋に、自分の親分の出世といふ氣持で受け取つてゐるやうに見えた。ある朝、電車の吊り革に並んで立つてゐながら吉村が言つた。

「眞田さん、家内が奥さんからうかがつたお話ぢや、家をお建てになるさうですね。」

眞田はのんきに答へた。

「いや、そんな事ぢやない。いい借家でもあれば、娘の學校に近い方へ越さうかと思つてはゐるがね。第一、建てたりするのは厄介だ。建材屋や請負の利益つてのは、我々には分つてるからね。」

「しかし、眞田さん、あんたのやうな立場になつたら、やつぱり相當のお邸に住まなくつちやいけません。うちの重役仲間のつき合ひなんざあ料理屋でもいいが、外國の學者でも訪ねて來てごらんなさい。國辱もんですぜ。」

吉村の話し方には、偉い學者である親分を自慢する無邪氣なテラヒがあつた。しかし、吉村が、眞田が技師から取締役になつたことを輕く見、學者として認められたことを重く見てくれたのが眞田佐平には嬉しかつた。十何年も同じ工場で苦勞した人間として、吉村は自分の氣持を分つてくれる、と思ひ、眞田はちよつと感動して默つてゐた。

「お買ひになつたらどうです。二百萬以上の家になると、買ふ方が建てるのの半値ですからな。」

「さういふものかね。」

「さうですとも。中央線の方がいいんでせう？　あつちから通つてゐる連中に聞いて見てあげまさあ。」

さういふ會話をした二週間ほど後の日曜日の朝、吉村忠一がやつて來て、格安の手頃な家が荻窪にあるから、見るだけ見ませんか、と、誘つた。たか子が飛び上るやうにして緣側に出て來て言つた。

「本當？　ねえ、吉村の小父さん、どんなお家？　私もパパと一緒に行つて見るわ。」

吉村は庭の中に何か考にふけつている顔つきで立つたきり、たか子の質問には答へようとしなかつた。妻の文子は、家を見るのも樂しく、珍しく夫や娘と一緒に外出するのも嬉しい、といふ表情で、エプロンを外しながら出かけることに同意した。眞田は、何か厄介なことが始まりさうな氣配を感じたが、吉村の親切を無にするのも惡いと思つて、

四人で出かけた。それは國鐵電車の驛から十分ぐらゐの所で、農家の庭さきの空地に建てられたちよつと古びた洋館であつた。その農家も近くとり壞すので、庭がそれだけ廣くなる、といふ話を吉村がした。その洋館が大正末期のシャレた感じのまま古びているのが眞田の氣に入つた。しかし、吉村は、その農家に入つてしばらく話してから出て來て、ひどく不機嫌なさまで、昨日買ひ手がついたさうだ、と言つた。

「遲かつたな、遲かつたな」と吉村が獨語を言つた。眞田が聽き耳を立てると、吉村は續けて呟いた。「なに、すぐ別のを見つける。」

歸り道にたか子は母親に言つてゐた。

「ねえ、お母樣、私、あの家を買へなくつてよかつたと思ふの。だつて何だか陰氣だわ。」

十九歳のたか子の言ふことが、眞田の考を少しづつ變へて行つた。何もおれの青年時代の妙なノスタルジイを滿足させる必要はないんだ。おれのために買ふ家ぢやない。あんまり流行型でない範圍で、娘の夢を滿たすやうな家だつたら、それで構やしない。

眞田佐平は、父が破產してから後に、家庭教師をしながら大學へ通つた時代のことを、忘れることができなかつた。本鄕の高臺の日當りのいい場所に、窓を明るく大きく取り、庭の木をよく手入れして、玄關は自動車が入れるやうに構へた家が何軒も並んでゐた。さういふ家々の一軒に大學の制服と制帽だけを賴りとして家庭教師として入つて行き、久我家吉を思はせるやうな明るさと傲慢さとを顏に出してゐる少年たちを教へる度に、眞田は、自分は生涯こんな家に住むことにはならない、と思つた。そして腹立たしく、慘めな、絕望を感じた。學校を出て勤めると、七十圓か八十圓の月給がどんなに上つても二百圓どまりだらう。法科か經濟科を出た世渡りのうまい連中か、金持ちの子弟だけにしか、營利會社の重役の地位は約束されていない、と彼は長いあひだ思ひ込んでゐた。それなのに、眞田佐平は、親の力にもよらず、口先の世渡りにもよらず、買はうと思へば、そんな家も買へる。それが眞田には不思議であつた。別に惡いことをしたわけでもない。あの哀れな巷の發明屋たちのやつと得た特許を買ひ叩いては金儲けばかり狙つている山師どもに較べたら、おれはもつともつと立派な家に住んだつていい。ただおれの方で、そんな山師どもと同じやうな贅澤の形式の中に住むのを斷りたいだけだ、と思つた。そして彼は、とにかく目さきに突きつけられたその機會を一つ外したので、いくらか心が安まるやう

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c